〔B 年〕棕櫚の主日(2026 年 3 月 29 日)

【旧約聖書日課】イザヤ書　55章1～11節

1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。
銀を持たない者も来るがよい。
穀物を求めて、食べよ。
来て、銀を払うことなく穀物を求め
価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い
飢えを満たさぬもののために労するのか。
わたしに聞き従えば
良いものを食べることができる。
あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。
3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。
聞き従って、魂に命を得よ。
わたしはあなたたちとともとこしえの契約を結ぶ。
ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。
4 見よ
かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし
諸国民の指導者、統治者とした。
5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。
あなたを知らなかった国は
あなたのもとに馳せ参じるであろう。
あなたの神である主
あなたに輝きを与えられる
イスラエルの聖なる神のゆえに。
6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
7 神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば
豊かに赦してくださる。
8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なると
主は言われる。
9 天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。
10 雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ
種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。
11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ
わたしが与えた使命を必ず果たす。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書　16章1～8節

1安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。2そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。3彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。5墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。6若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」8婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

イザヤ書　55章1～11節

1 さあ、渇いている者は皆、水のもとに来るがよい。
金のない者も来るがよい。
買って、食べよ。
来て、金を払わず、代価も払わずに
ぶどう酒と乳を買え。
2 なぜ、あなたがたは
　　糧にもならぬもののために金を支払い
腹を満たさないもののために労するのか。
私によく聞き従い
良いものを食べよ。
そうすれば、あなたがたの魂は
　　豊かさを楽しむだろう。
3 耳を傾け、私のところに来るがよい。
聞け、そうすればあなたがたの魂は生きる。
私はあなたがたと永遠の契約を結ぶ。
ダビデに約束した、確かな慈しみだ。
4 見よ、私は彼を諸国の民への証人とし
諸国の民の指導者、司令官とした。
5 見よ、あなたが、知らない国民に声をかけると
あなたを知らない国民があなたのもとに走って来る。
これは、あなたの神、主のため
あなたに栄光を現した
　　イスラエルの聖なる方のためである。

6 主を尋ね求めよ、見いだすことができるうちに。
主に呼びかけよ、近くにおられるうちに。
7 悪しき者はその道を捨て
不正な者は自らの思いを捨てよ。
主に立ち帰れ
　　そうすれば主は憐れんでくださる。
私たちの神に立ち帰れ
　　主は寛大に赦してくださる。

8 私の思いは、あなたがたの思いとは異なり
私の道は、あなたがたの道とは異なる
　　――――主の仰せ。
9 天が地よりも高いように
私の道はあなたがたの道より高く
私の思いはあなたがたの思いより高い。
10 雨や雪は、天から降れば天に戻ることなく
必ず地を潤し、ものを生えさせ、芽を出させ
種を蒔く者に種を、食べる者に糧を与える。
11 そのように、私の口から出る私の言葉も
　　空しく私のもとに戻ることはない。
必ず、私の望むことをなし
私が託したことを成し遂げる。

ローマの信徒への手紙　6章3～11節

3それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・
イエスにあずかる洗礼〔バプテスマ〕を受けた私たち
は皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。4
私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その
死にあずかるものとなりました。それは、キリストが
父の栄光によって死者の中から復活させられたように、
私たちも新しい命に*生きる〔直訳→歩む〕*ためです。5
私たちがキリストの死と同じ状態になったとすれば、
復活についても同じ状態になるでしょう。6私たちの内
の古い人がキリストと共に十字架につけられたのは、
罪の体が無力にされて、私たちがもはや罪の奴隷にな
らないためであるということを、私たちは知っていま
す。7死んだ者は罪から解放されているからです。8私た
ちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に
生きることにもなると信じます。9そして、死者の中か
ら復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、
と知っています。死は、もはやキリストを支配しませ
ん。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死
なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生
きておられるのです。11このように、あなたがたも、自
分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリ
スト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。

マルコによる福音書　16章1～8節

1安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母
マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香
料を買った。2そして、週の初めの日、朝ごく早く、日
の出とともに墓に行った。3そして、「誰が墓の入り口
からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っ
ていた。4ところが、目を上げて見ると、あれほど大き
な石がすでに転がしてあった。5墓の中に入ると、白い
衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、女
たちはひどく驚いた。6若者は言った。「驚くことはな
い。十字架につけられたナザレのイエスを捜している
のだろうが、あの方は復活なさって、ここにはおられ
ない。御覧なさい。お納めした場所である。7さあ、行
って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あ
なたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われ
たとおり、そこでお目にかかれる。』」8彼女たちは、
墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。
そして、誰にも何も言わなかった。恐ろしかったから
である。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・4 月 5 日「復活日」の日課主題は「キリストの復活」。
・旧約日課は、「イザヤ書」から、神の御言葉に信頼すべきことを告げる預言箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、洗礼についての教えの理解をキリストの死と復活に結びつけて説く箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスの葬られた墓が空であったことを伝える箇所。

旧約日課（イザヤ 55 章より）

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）の区分で「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。概説は、資料「聖書と祈りの会 260304」などを参照。
・日課箇所は、「イザヤ書」後半部（40 章以下＝「第二イザヤ」）の中で第一部（40～55 章）として扱われる区分の末尾を構成する章句の一部。「イザヤ書」後半部の第二部（56～66 章）を第一部と明確に分けて「第三イザヤ」として扱う聖書学者もあるように、55 章は 40 章から展開されてきた「第二イザヤ」の思想的立場を明示するような内容となっている。端的に、「第二イザヤ」の思想的立場は、「神の御言葉に対する信頼と希望」にあると言える。
・日課箇所を含む 55 章は、新共同訳で区分されているように 4 段落で解釈することができる。このうち、第 1 段落（1~5 節）と第 3 段落（8~11 節）は、主なる神から人に向けられた宣言と解することができる。他方で、第 2 段落（6~7 節）と第 4 段落（12~13 節）は、預言者が人に向けた勧告および祝福派遣と解することができる。
・第 1 段落（1~5 節）は、神が無償の糧を恵みとして与えてくださる方としてご自身を示されることから始められているが、2~3 節で展開しているとおり、これは、「神の言葉」が無償で与えられることを指し示す比喩である。ただし、それは単なる比喩なのではなく、「日毎の糧（パン！）」を無償の恵みとして認識することが、「神の言葉」を「命のパン」として認識することの前提として物語られる「モーセ物語」（「出エジプト記」から「申命記」まで）で繰り返し提示される神学構造を踏襲するものであり、「神の恵みの糧（パン！）に感謝する」という宗教実践と深く結びついたものと解せる。この神学構造は、新約正典でも繰り返し踏襲展開されており、初代以来の教会が受け継いできたものであると見ることができる。
・一連の預言で「あなたたち」と呼ばれている者は、前 6 世紀後半、ペルシア王キュロスによってバビロン捕囚から解放されて始められたユダヤ帰還事業の第一世代が 4 つの「主の僕の歌」で描かれるように苦汁を舐めたことを知っている第二世代以降の帰還事業の担い手と考えられる。4～5 節で提示されるように、この帰還事業は、単に旧ユダ王国共同体の再建としてではなく、諸民族を含む「新しいイスラエル」の形成として構想されている。このことは、56 章でも明示。

使徒書日課（ローマ 6 章より）

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。概説は、資料「聖書と祈りの会 260318」などを参照。
・日課箇所は、「洗礼」が、キリストの死と復活を信仰者自身のものにするためのものであったという主張を展開した上で、その「死と新しい命」にふさわしい生き方が「律法」に依存しないものとして成立しうることを示そうとしている。
・「洗礼」が初期教会でどのように理解されていたのかは、関連する記述が新約正典全体でも限られており、明示することが難しい。「共観福音書」および「使徒言行録は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことを前提に、ヨハネの洗礼の延長上にある「悔い改めの洗礼」を土台としつつ、「主イエスの洗礼」における「聖霊降臨」と「神の子宣言」の特異性を強調し、弟子たちの教会が洗礼者ヨハネの洗礼（水の洗礼！）の形式を継承しながら「聖霊降臨」と「神の子宣言」を含む「主イエスの洗礼」（霊の洗礼！）を自分たちの営みとして実践しようとしていたことを示唆している。おそらく、使徒たちの教会は、「主イエスの洗礼」に倣った洗礼を、「主イエスと一体となってその教えと実践に倣う弟子」として歩み始める入会儀礼として位置づけ、実践していたのだろう。パウロも、基本的にはこれを踏襲して、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受ける」（直訳「キリスト・イエスへと洗礼される」）という言い方をしていると考えられる（3 節、ガラ 3:27）。この「〇〇へと洗礼される」という表現は、何らかの権威等への所属行為を意味するものとして広く用いられていたと考えられ、パウロは、「モーセに属するものとなる洗礼を授けられ（直訳「モーセのものへと洗礼され」）」（Ｉコリ 10:2）という表現もしている。また、「福音書」や「使徒言行録」で示唆される「洗礼」による「聖霊降臨」についても、パウロは、「皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらった」（Ｉコリ 12:13）と述べて、議論なしに前提としている。他方で、日課箇所でパウロが展開している「キリストと結ばれるための洗礼」によって「キリストの死と復活にあずかる」という主張は、パウロが「コロサイ書」2:12 でもう一度言及しているほかは、「Ｉペトロ書」3:21 がほのめかしていると解せる記述をしているのみであり、パウロ独自の洗礼理解であったことが示唆される。パウロは、「Ｉコリント」15:29 でも、「洗礼」が信仰者における「死と復活」を現実化する営みであるとの認識で述べている。
・3 節と 11 節の「キリスト・イエスに結ばれ」は、同じ訳表現であるが、原語表現は異なり、ニュアンスが異なる。3 節は「キリスト・イエスへと」というニュアンスで、「洗礼」による「キリスト」への参入を意味している。他方で 11 節は、「キリスト・イエスの中で」というニュアンスで、「洗礼」によって「キリスト」に参入した者の立ち位置を意味している。

福音書日課（マルコ 16 章より）

・日課箇所は、主イエスの遺体が葬られた墓の入口が開かれ、遺体が喪失していることを女の弟子たちが発見したことを伝える伝承説話で、一般に基底となる「イエスの復活伝承説話」と位置づけられる。この伝承説話の基本的な枠組みは、四福音書で共通しているが、細部において相違がみられる。

・「イエスの復活伝承説話」を扱うにあたって、「マルコ福音書」の末尾の問題を考慮する必要がある。新共同訳は、8 節までで本文を一旦区切り、その後に続く「結び」について、二種類の写本系列に基づく異なる「結び」説話を重ねて提示している（「結び一」および「結び二」）。有力な写本系列は「結び」を欠いており、新共同訳は、「マルコ福音書」に三通りの末尾が想定されていることを示している。ここでは、1～8 節との整合性を考慮して、二つの「結び」はいずれも後代の付加とみなし、8 節を福音書末尾と解しておく。

・「マルコ」は、「イエスの復活伝承」を「復活顕現」としてではなく、「復活告知」としてだけ示している。「復活」そのものが具体的にどのような現象であったのかということに関心を向けず、ただ、主イエスご自身が予告されていた「復活」を弟子たちがどのように受けとめるのかということに関心を向けている。

・7 節で「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい」と「若者」に告げられた「婦人たち」は、8 節の記述によれば、「だれにも何も言わなかった」とされており、文字通り理解すれば、彼女たちは弟子たちやペトロに自分たちが聞いた「復活告知」を告げなかったということになる。それでは、弟子たちやペトロらは、どのようにして「復活のイエス」と「ガリラヤでお目にかかる」ことができたのだろうか。一つの解釈は、8 節の記述にもかかわらず、婦人たちは、その後、弟子たちやペトロらに「復活告知」を告げたので、彼らはガリラヤに行って「復活のイエス」と会うことができた、という説明。別の解釈は、弟子たちやペトロらは、婦人たちから「復活告知」を聞くことなしに、主イエスご自身が予告していた「復活」について思い出し、ガリラヤの地で「復活のイエス」とお会いした、という説明。婦人たちから「復活告知」を聞いたかどうか、弟子たちの間で認識の相違があったとすれば、矛盾する記述があるように見えても、整合性を保つ説明は可能。

・婦人たちに「復活告知」をする「白い長い衣を着た若者」を、他の福音書はいずれも「天使」と同定している。5 節「若者（ネアニスコス）」は、「マルコ」が当局者らに逮捕された主イエスのことを弟子たちが皆見捨ててしまったときに一人ついて来ていた人物を独自に伝える際に用いており（14:51~52）、この人物と同一であると解する者もある。14:51「一人の若者」については、本福音書の書名にもなっているバルナバの親戚として知られる「ヨハネ＝マルコ」ではないかという伝承も知られている。

来週の誕生日 （4 月 5 日～11 日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-331「**主はよみがえられた**」は、テゼ共同体の讃美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ（ブラザー・ロジェ）が、1940 年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始まった祈りの共同体（観想修道会に近い）。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975 年以降、テゼ共同体のために多くの讃美を作曲した。

・21-325「**キリスト・イエスは**」（＝Ｉ148「**すくいのぬしは**」）は、原詞が 14 世紀のラテン語聖歌で、1708 年発行英語讃美歌集『ダビデの竪琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讃美歌として歌われてきた。

・21-322「**天の座にいます**」は、M・ルターと同世代のボヘミア兄弟団メンバーM・ヴァイセの作詞で、原詞は 20 節あるが、『讃美歌 21』では現代ドイツ語讃美歌版に基づいて 6 節で編集。曲は、17 世紀初頭、ルター派作曲家ヴルピウスによってこの歌詞のために作曲された。Ｉ147「**よろこびたたえよ**」は同じ讃美歌ではなく、別の英語讃美歌歌詞が付けられた『讃美歌』（1954 年版）独自のもの。

21-331「主はよみがえられた」

Surrexit Dominus vere

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia, / Surrexit / Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

21-325「キリスト・イエスは」

Surrexit Christus hodie

(English Translation)

1. Christ the Lord is ris'n today, Alleluia! / Sons of men and angels say, Alleluia! / Raise your joys and triumphs high, Alleluia! / Sing, ye heav'ns, and earth reply, Alleluia!
2. Love's redeeming work is done, Alleluia! / Fought the fight, the vict'ry won, Alleluia! / Jesus' agony is o'er, Alleluia! / Darkness veils the earth no more, Alleluia!
3. Lives again our glorious King, Alleluia! / Where, O death, is now thy sting? Alleluia! / Once he died our souls to save, Alleluia! / Where thy victory, O grave? Alleluia!

21-322「天の座にいます」

Gelobt sei Gott im höchsten Thron

1. Gelobt sei Gott im höchsten Thron / samt Seinem eingebornen Sohn, / der für uns hat genug getan. / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
2. Des Morgens früh am dritten Tag, / da noch der Stein am Grabe lag, / erstand er frei ohn alle Klag. / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
3. Der Engel sprach: "Nun fürcht' euch nicht; / denn ich weiß wohl, was euch gebricht. / Ihr sucht Jesus, den find't ihr nicht." / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
4. "Er ist erstanden von dem Tod, / hat überwunden alle Not; / kommt, seht, wo Er gelegen hat." / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
5. Nun bitten wir Dich, Jesu Christ, / weil Du vom Tod erstanden bist, / verleihe, was uns selig ist. / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
6. O mache unser Herz bereit, / damit von Sünden wir befreit / Dir mögen singen allezeit: / Halleluja, Halleluja, Halleluja.